

宝塚中山台のオオバヤシャブシ対策その後

小笠原寛

市立西脇病院 耳鼻咽喉・頭頸部外科

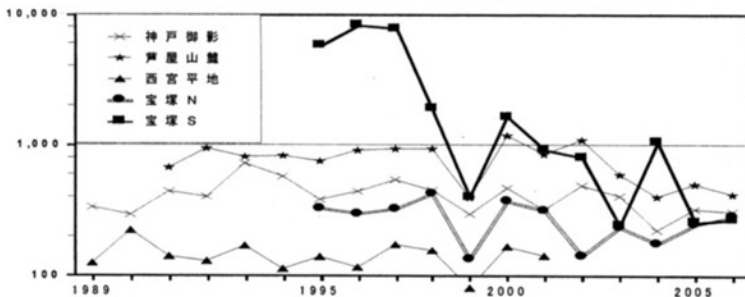
ハンノキ属オオバヤシャブシは開発後の法面保護や緑化として植えられ 1980 年代から阪神地区にて花粉症が顕著になった。その花粉症は以下の特徴を持つ。

- ・ スギ花粉と飛散期が重なるため花粉症の有症率を 2 倍に増加させる
- ・ 花粉濃度に比例した有症率と生涯の花粉吸入量の発症関与がみられる
- ・ 花粉と果実との共通抗原から Class 2 食物アレルギーが合併する

宝塚市中山台は山を切り開いた後にオオバヤシャブシを 2 万本植えた結果、アンケート調査で春季花粉症の有症率が 23.8%、果実アレルギーが 5.0%で果物が売れない地区である。ここで 1994 年来、花粉源対策を地域住民が主体的に行い、その途中経過を本学会で報告してきた。11 年目の経過を報告する。

天文学的飛散数であったが、1998 年には六甲山麓住宅地なみに、現在はそれを下回った。2003 年にはオオバヤシャブシに対する IgE 抗体を比較できた 7 名では 6 年間で平均 20.4 以上から 1.82IU/ml へ低下した。花粉症だけでなく果実に対する反応低下もみられ、食べ始めた方もいた。住民活動に対する妨害が減少し、地域の活性化と街の美化という期待した副産物を生んでいる。

丹波山地では 2000 年夏からスギとヒノキ雄花の着花量が増加に転じ、よく春より花粉量として現れた。これは地球温暖化の影響と考えられ、ヒノキで著明である。ヒノキは品種改良など対策が全くできておらず、症状の強い人も現れている。オオバヤシャブシ花粉源対策は狭い地区では成功したが、六甲山麓でやや減少傾向が見始めたものの、環境基準と考えている年間 200 個/cm²にはほど遠く、ヒノキとならび憂慮に耐えない。



カバノキ科花粉飛散数推移

単位は個/cm²